

上田保姆伝習所・旧宣教師館を訪ねて

(1905～1919)

(1904～1941)

石津 珠子

東洋英和女学院の歴史に東京（麻布・六本木）と並んで登場する上田（長野県）の地名は、上田保姆伝習所とその後の本学院の保育者養成教育の歴史と結びついて記憶に留められてきた。折々に編まれる年誌によれば、1905年、上田保姆伝習所（以下伝習所）は、前年に上田丸堀町（現大手町）に建てられたカナダメソジスト女性宣教師の住宅である宣教師館内に設置され、1919年、麻布鳥居坂東洋英和女学校付属保姆養成科として合併し、東京に移転した。以来幼稚園師範科(1921)と改称し、短期大学保育科(1950-98)、今日の大学人間科学部の保育者養成(1998～)の歩みの原点として伝習所は理念的・イメージ的存在であったように思われた。ところが、短大保育科40年史『東洋英和女学院保育者養成の歩み』（1994）刊行の計画で、偶然にも上田に創建当初の伝習所の建物（当時三吉治敬氏所有）が、伝習所時代の実習園・梅花

幼稚園（1900創立、現在も当時の木造園舎を使用）に隣接して存在していて、近々老朽化のため取壊されるときき、すぐに私と吉岡良昌氏が見学し、その実感を胸に初期の保育者養成の記述を書き上げることができた。その後1994年上田市が歴史的建物（アーリーアメリカン様式。独立前のアメリカのイギリス系植民者の下見板張の純粋な西洋建築と評価）として、この建物を郊外に移築し解体復元して、今日一般公開している（下の写真）。現所在地の上田市大字下之郷812-8に移されて後、再々訪問する機会を得て、往時の宣教師の住宅兼教室として使用された様子を建物の空間の内外に身をおいて、さらに深い理解をもつ解説（上田新参町教会関係者、現在牧師夫人久世サツ子氏が担当）に助けられて、豊かに想像説明することができる。敷地の外周もまた当時と同様に「からたち」が植えられて、信州の厳冬の中にも濃い緑の枝を

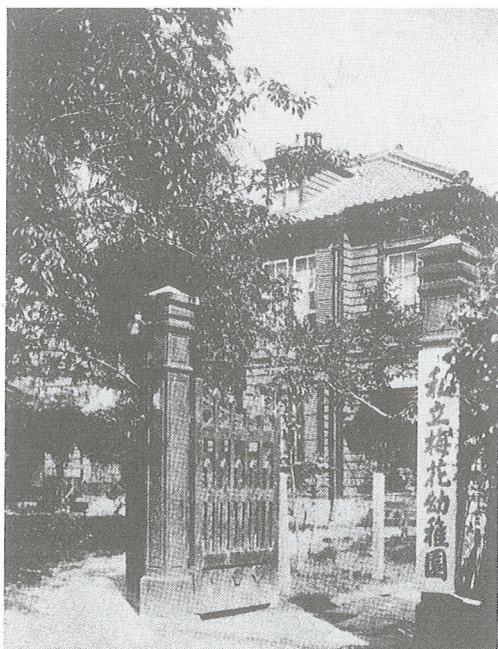
張り、その様はゆかりのある梅樹とともに女性宣教師たちの強い意志を象徴するかのようである。

こうして一つの建物が残された経緯を通して、伝習所の歴史とその地に播かれた幼児教育を支えてきた人々の力を感じることができた。しばし『梅花・常田幼稚園創立80年小史』（1980）と『長野



『長野県私立幼稚園連合会1970』を参考にそのことを考えてみたい。1884年カナダ婦人伝道会社よりミス・カートメルが日本に派遣されて始まる働きは、伝道のかたわら教育事業の展開にあり、東京・静岡・山梨の三英和女学校が誕生する。長野での女学校開設が難航する中で、幼稚園の開設へと導かれ、1898年長野県町教会及び旭町の婦人宣教師館で旭幼稚園が始められたのを機に、上田メソジスト教会員の要請を受け、1900年上田の民家で幼稚園が週3日出張の形で出発し、1902年現在の洋風の園舎を建設し、梅花幼稚園と改称して定員100名の新設備の保育が始められた。この充実した最初の施設を実習所とし、初代デ・オルフの下、保姆伝習所が設けられた。宣教師館を教室に、同敷地内に寄宿舎（1937焼失）を備え、さらに常田幼稚園を設立し、2代所長ドレイクによりさらに進歩的な保育者養成の実践と講義が休みなく講ぜられたとある。講師陣に当時の蚕業学校長の三吉米熊氏（理科）、上田高女の町田清太郎氏（絵画）、上田中学教頭山口沢之助氏（教育学・心理学）などの名がみえる。

戦色強まる中、宣教師たちが引揚げる時、1941年ミッションは梅花の土地建物、常田の建物・教育事業、一切の管理・運営を、教会に譲渡一



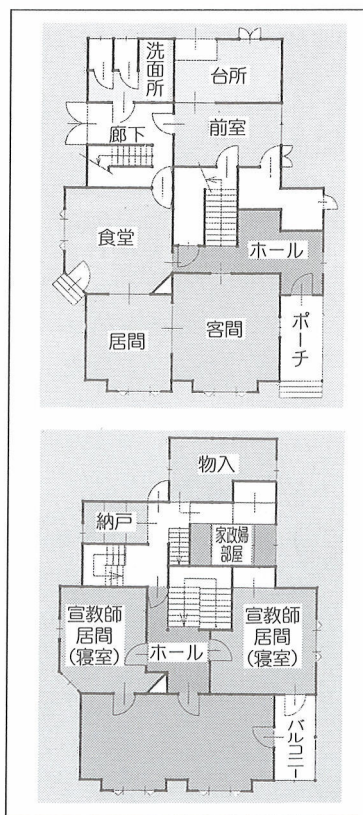
梅花幼稚園の正門よりのぞむ 1905年頃

任した。

そして宣教師館はその土地・建物を前述の三吉家へ売却し、その後50年間住宅・病院として用いられ上田市に寄贈された。（旧）宣教師館は再び多くの人々の前に伝道と幼児教育の一世



デ・ウォルフ先生と上田保姆伝習所の生徒 1908年紀にわたる結びつきの証しとして残されたのである。（東洋英和女学院大学教授）



宣教師館平面図

上1階、下2階（パンフレットより）

<思い出の先生がた> 4

ミス・ハミルトンの思い出

池田道子

F. G. ハミルトン先生はお背の高い、がっしりとした、威厳のある美しい校長先生でいらっしゃいました。私は昭和4年、高女部に入学し、9年3月卒業しましたが、その5ヶ年間先生は、慈愛にみちた御目と御配慮のゆきとどいたお頭で、活気にあふれてはいたが何をしでかすか未知の未来を前にしている生徒たちを校長先生として英和の生活を御指導なさって居られ、私共は雛鳥のように親鳥「ハミちゃん」（とお呼びしていましたが）の翼の影に安心しきった生活をいたしました。

学校は5日制で、土・日休校、毎朝、礼拝から学校生活が始められました。礼拝は当時、隣接の日本メソジスト麻布教会をお借りしておこなわれていて、400余名の全校生徒がピアノのマーチに合わせて入るのを、校長先生は入口に立って導びかれたのですが、ガーネット色のスカーフが正しく結ばれてなかったり、スカートの長さが気になる生徒も居るので入口を通るのは緊張する瞬間でした。

英語の時間は通訳の先生も一緒にお入りでしたが、校長先生の第一声はグッドモーニング・エブリボディーで私共はグッドモーニン・ミス・ハミルトン。初めての英語で胸が高鳴ったのを忘れません。校長先生自らお教えになられたのは、発音を正しくする御方針だったのでしょか。

そうした5年間、1クラス25名が2クラス。皆が姉妹のように仲よしでした。

卒業の時、私たちはサイン帳を用意して、1人1人の先生がたにお言葉をお願いし、そのおねだりに応じて下さったサイン帳を80才を過ぎた今も宝物として大切に、時折そつとのぞいて当時を思い出すのです。

或時、学園祭の折、ミス・ハミルトンを中心に5、6人がかたまっていた時、若い卒業生が先生のおそばに走りよって「先生、私、近く結婚いたします」と、先生「それは、おめでとう。その人は教会に行っていますか」と尋ねられました。すると彼女は「いゝえ」と返事をしてニコニコ笑いながら小走りに去りました。「こう

して、だんだん教会から離れてゆくのです」と淋しそうにお言いにられたことは忘れられません。何年前のことだったでしょう、それを思い出すごとに先生のお心を思い、目頭が熱くなるのです。

もう一つ忘れ得ないのは、日米戦争初期の頃、私は2歳の幼な子を背負って三河台の西洋の先生がたの宿舎をおたずねしたことがありました。ハミルトン先生は昨日、東北地方へのご旅行から帰られたということで「汽車の両側の、水田の稲の穂が重そうに頭を下げておりましたよ」とおっしゃいました。そうでしたかと私どもは喜びの声をあげました。そのように先生は日本の食料事情をも案じておられるのを感じ、大きな母性愛にふれたのでした。

もっともっとある思い出ですが、ハミルトン先生は多くの卒業生たちに忘れられぬ導いものを残されて居ります。

(1934年高等女学科卒業)

ミス・ハミルトン略歴 (Frances Gertrude Hamilton)

- | | |
|------------|-------------------------|
| 1988年8月17日 | 誕生 |
| 1910年 | マウントアリソン大学卒業 |
| 1917年 | カナダ・メソジスト教会婦人宣教師として来日 |
| 1917年 | 東洋英和女学校音楽科教諭就任 |
| 1923年 | コロンビア大学大学院修了 |
| 1925年 | 東洋英和女学校校長に就任 |
| 1947年 | 山梨栄和高等学校英語科教員就任 |
| 1951年 | 東洋英和女学院短期大学教授、同保育科主任に就任 |
| 1975年3月16日 | 逝去 |



資料紹介 1 「名簿」

谷川 祐子

史料室には、実に多種多様な資料が保管されている。百余年にわたる公文書、逐次刊行物、写真、教科書、成績簿、卒業証書、設計図、日誌類、手紙、書籍、食器、記念品、プログラム、テープ、CDなどである。これらの資料をもとに、『東洋英和女学校五十年史』・『東洋英和女学院七十年誌』・『東洋英和女学院百年史』などが書かれたのであるが、具体的にどのような資料があるのか知りたいという声があり、資料紹介を始めることにした。

史料室への問い合わせで多いのが在籍、卒業の確認である。何年に英和に学び、いつ卒業したか、写真があるかどうか。このような時に調べる名簿関係の資料を今回は紹介したい。

手書きの名簿 通勤教員・高等女学校・小学科・師範科の部に分かれており、3×19cmのカードに、本人または保護者が手書きで住所・氏名・生年月日を記したものが、1ページに7枚ずつ貼られている。刊行年は記されていないが、大正4、5年生まれが高等女学校五年に在学しており、東光会の名簿と照らし合わせると、1932年の名簿と考えられる。厚さが10cmもある分厚いものである。

〈 現在の中学部・高等部 〉

『母の会名簿』 昭和15年・16年 東洋英和女学校 母の会

『会員名簿並学校関係者及学校職員住所』 昭和17年

『会員名簿並学校職員住所』 昭和18年・19年
残念なことに昭和20年・21年・22年・23年の終戦の年から4年間の名簿が欠号である。

『生徒・父兄及職員名簿』 昭和24年・25年・26年 東洋英和女学院中学部高等部母の会

『生徒及保護者名簿』 昭和27年・28年

『生徒・保護者名簿』 昭和29年から現在

〈 現在の小学部 〉

『児童名簿』 昭和14年・15年・16年 東洋英和女学校小学科 小羊会

昭和17年 東洋英和女学校附属初等学校

『児童保護者名簿』 昭和18年 東洋永和女学院初等科

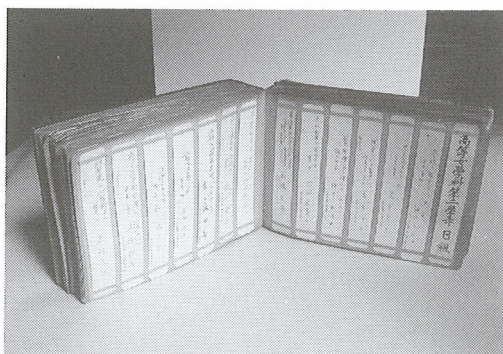
昭和19年・20年・21年・22年・23年・24年・25年は欠号である。

『児童・保護者名簿』 昭和26（1951）年から現在 東洋英和女学院小学部・母の会

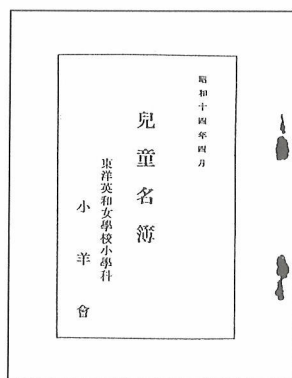
〈 同窓会 〉

『東洋英和女学校同窓会報告』及び『東洋英和女学校同窓会会報』

第1回同窓会が1895（明治28）年に開かれ、以後同窓会は年2回、春と秋に行われた。そ



手書きの名簿 1932年当時



『児童名簿』1939年

の報告のために、年1回刊行されたものである。内容は各号、多少の差はあるが、明治期のものは、同窓会報告（日時・場所・参集人数・会の進行状況・議事報告）、会計報告、新規入会者・転居者・現教員・旧教員並に職員・同窓会会員の姓名と住所、報告書印刷料（後に会費）既納者氏名、印刷料未納者氏名、同窓会委員氏名、同窓会会則、会員消息（進学・仕事・結婚・出産・病気・子供、孫の英和入学・渡航・帰国・訃音など）、学校報告（教員数・生徒数・文学会・王女会・青年矯風会など）、寄附領収金額及姓名などが記されている。

大正期は欠号が多いが、高等女学校聯合同窓会に加盟したため、その報告が加えられた。また『同窓会会報』と名称が改まっている。

昭和期になると、内容が豊富になり、100ページを超えるものもある。母校創立五十年記念号である昭和9（1934）年度の会報は、邦文215ページ、英文30ページから成るものである。大きな変化は昭和2（1928）年度の見開きに「会員諸姉の御寄稿を歓迎いたします。折々の御通信を始めとして、創作、感想、随筆、翻訳、詩、凡てご自由でございます。」とあり、会員の投稿の場ともなってきたことである。この号には、村岡花子氏（1913年卒）の創作「サファイアの貴婦人」や歌人でアイルランド文学の翻訳者である片山広子（松村みね子）氏（1894年卒）の翻訳「漁師」が掲載されている。なお、昭和6年までは、会報と会員名簿から成っていたが、会員数の増加のためか、昭和7年からは名簿は掲載されていない。昭和6年から別に名簿が作られるようになった。

『同窓会報告』及び『同窓会会報』は1896（明治29）年から1940（昭和15）年の東洋英和形成期から発展期にいたる44年間の会員並びに東洋英和女学校の貴重な記録である。創刊号と大正初期のものが現存しないことは、実に残念な事である。なお、一冊しかない年度のものも東光会で保管している。

欠号 明治28年（創刊号）・42年・44年
～大正7年・昭和5年

発行なし 明治37年

コピーのみ 明治29年

落丁 明治38年 P. 39、40

『同窓会会員名簿』 昭和6年～17年

『東洋英和女学院 東光会員名簿』 昭和24・27・28・29・33・36年

『東光会名簿』 1964・68・73・78・83・90・96・2001年

『枇杷』 師範科同窓会

師範科同窓会の「東洋英和女学校枇杷の会」が発行したもので、在校生の実習報告、創作童話、母校の消息、会計報告、同窓会名簿などが、記されている。『枇杷』は第9号より「従来幼稚園師範科卒業生の方々は『枇杷』といふ会誌を出してみられましたが本年度よりそれを解消して同窓会報と合流されました。」とあり『同窓会会報』に合併掲載して発行された。

第1号 1925（大正14）年～第8号 1933（昭和8）年まで全て揃っている。

『思ひ出』 東洋英和付属幼稚園同窓会

幼稚園創立20年を記念して創刊号が1935（昭和10）年に発行された。ブラックモア先生の「幼稚園の誕生」やステープル先生、ドレーク先生をはじめとする先生方のエッセイ、現在の幼稚園の様子が記されている。最後に「保母並卒業生名簿」として、歴代園長及び保母・第一回卒業生1914（大正4）年から第二十一回卒業生までの氏名、住所が記されている。第二号は、ジョスト先生・レーマン先生のエッセイ、「幼稚園日誌より」、卒業生の思い出、出征した方の手紙、同窓会報告、第二五回卒業生までの名簿が載っている。

創刊号 1935（昭和10）年

第二号 1939（昭和14）年

以上、明治、大正、昭和初期を中心とした名簿関係の資料紹介をしたが、たった1号欠けていることにより、埋もれてしまう歴史がある。名簿類は基本的な史料のひとつなので、揃えておきたいものである。卒業生の方々に声をかけていただき、資料の提供をお願いしたい。

（史料室嘱託・中高部非常勤講師）

2001年度 史料室報告

- 4月
- ・研究者の依頼によりロシア人の東洋学者、ニコライ・ネフスキー氏の次女の在籍確認（1925～1934年頃、小学科・高等女学科に在籍）及び写真探し。
 - ・コンピューター導入。
- 6月
- ・明治時代の女子教育について調べに大学院生（卒業生）来室。
- 7月
- ・『東洋英和女学院120年史』の構成及び目次検討。
- 9月
- ・『東洋英和女学院120年史』、年表作成開始。
 - ・『史料室だより』57号に「史料室の歩み」を執筆。
 - 「1985～1991年」を芝原 翠が担当。
 - 「1991～2001年」を鳥居美子が担当。
 - 「現在」を谷川祐子が担当。
 - ・『史料室だより』57号、編集及び校正。
- 10月
- ・浜松で国産オルガンを最初に弾いた人物が東洋英和の卒業生らしいとの事で、音楽史の研究者来室。『同窓会報告』で彼女が浜松のキリスト教会に住んでいたことが確認される。
- 11月
- ・『史料室だより』57号刊行。
- 1月
- ・93歳の卒業生より、英和での一日を英語で表わしたたくさんの英文があり、すべてを思い出せないのを知りたいと12月に依頼あり。なかなかわからなかったが、The Sixty Sentences By Miss Blackmore であることが判明。60の英文が、『敬和会』23号（1976.9）にすべて載っており、お知らせした。
 - ・『史料室だより』58号に「資料紹介・名簿」を執筆。
- 2月
- ・コンピューターのデータベースソフト「File Maker」を導入。まず台帳作りを少しずつ行う。その後データベース化の予定。
 - ・キュックリヒ先生について調べるために、保育史の研究者来室。

- ・『東洋英和女学院120年史』について出版社と相談。
 - ・村岡花子先生について資料確認のため、卒業生でありお孫さんの村岡恵理さん来室。
 - ・『史料室だより』58号、編集及び校正。
- 3月
- ・『史料室だより』58号刊行。
 - ・『史料室だより』1号～50号を合冊にして、各部図書館等に配布の予定。

〔主な寄贈品〕

- ＊「保母養成施設指定申請書」昭和34年
- ＊1937(昭和12)年卒業アルバム
- ＊『母の遊戯及育児歌』上・下巻一フレーベル著と恩物の帳面 大正初期の幼稚園師範科の教科書
- ＊写真「ミス・カートメルと宣教師」・「初期の在校生」（1880年代）



- ＊下山田典子氏手記「戦時下の女学生」
- ＊「メサイアをうたう会」（東洋英和女学院同窓生有志の会）コンサートのCD・ビデオ
- ＊創立百周年記念「東洋英和女学院 校歌」シングルレコード
- ＊『駒場の50年－東京大学教養学部』
- ＊『清和学園百年史』
(史料室囑託 谷川祐子)

史料室のE-mailアドレスは
archive@mlsrv.toyoeiwa.ed.jp です。
